奈文研ニュース

No.40 Mar.2011

NABUNKEN NEWS

NARA CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE

独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577奈良市二条町2丁目9-1
http://www.mabunken.go.jp/

牡丹と都城と石窟と洛陽

奈良文化財研究所は、中国社会科学院考古研究所と2007年度より5カ年計画で、漢魏洛陽城の共同発掘調査を進めています。藤原京や平城京など日本の古代都城の源流は、西安や洛陽などの中国古代王朝の都にあると考えられています。日本と中国が共同でおこなっている国際調査は、古代の国際交流を考える上でも非常に重要なことがわかります。しかし、洛陽はちょっと遠くて、あまりなじみのない場所かもしれません。洛陽ってどんなところか紹介してみましょう。

洛陽は、中国河南省の真ん中ぐらいにあります。北京から飛行機で一時間半ぐらいのところです。兵馬俑や長安城で有名な西安がある陝西省の東に位置します。西安と洛陽は、高速鉄道（日本の新幹線）で結ばれていて、今なら1時間ちょっとで行き来できる距離です。唐の時代には、西安（長安）の都に対して「東都」と呼ばれていました。西安と洛陽の関係は、京都と奈良の関係に少し似ている気もします。

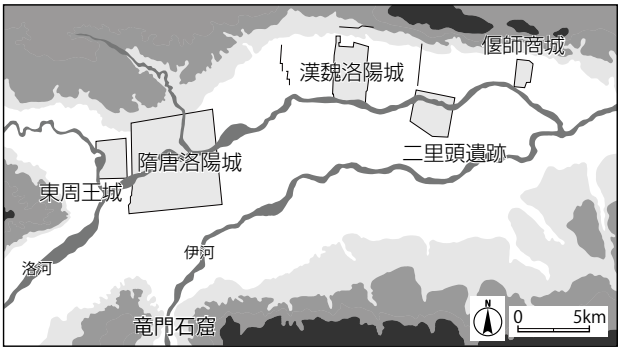
そそり立つ壁の実測作業

洛陽は奈良盆地を横にして大きくしたような東西に長い盆地です（下図）。東西50km、南北20kmぐらいで、洛河（らくが）と伊河（いが）が中央を流れています。伊河が南に抜ける場所に世界遺産で有名な竜門石窟があります。山西省大同市の雲崗石窟と同じく、北方遊牧民の鮮卑族が作り始めた石窟です。そして、彼らが都をおいたのが漢魏洛陽城です。後漢の都をそのまま使った宮城の外側に、平城京のような碁盤目状の街区を整備した初めての都市です。日本の古代都城のモデルは、唐の都にあると言われていますが、実はこの漢魏洛陽城においてそのモデルとなる要素の多くは生まれているのです。

一方、漢魏洛陽城の他にも洛陽には多くの都城があります。学者の間で世界的に有名な二里頭（にりとう）遺跡。中国最古の伝説の王朝－夏の都じゃないかと言われています。さらに殷（いん）と呼ばれる時代の偃師商城（えんししょうじょう）、東周の王城、そして中国史上唯一の女帝として知られる則天武后が都とした隋唐洛陽城。洛陽はまさに歴史の浪漫が埋もれる都です。

機会があったら是非、洛陽に足を運んでみてはいかがでしょう。そう、有名な牡丹が咲き乱れる春に。

（都城発掘調査部　城倉 正祥）



洛陽盆地の都城

発掘調査の概要

水落遺跡の調査（飛鳥藤原第165次調査）

水落遺跡は、1972年の発掘調査で大型基壇建物が発見されたことを契機に、1976年に国指定史跡となりました。この大型基壇建物は、その特異な構造と出土した土器の年代から、斉明天皇６年（660）に当時皇太子であった中大兄皇子が造った水時計である漏刻台と考えられています。第10次調査となる今回の調査区は水落遺跡の北辺に位置し、石神遺跡に接しています。石神遺跡では７世紀中頃の石組池や建物の遺構が確認され、『日本書紀』の記述にある斉明朝の饗宴の場の可能性が高く、またその後の７世紀後半の天武朝においては官衙的な施設に改造されたことが明らかになっています。これら両遺跡の間の様相を解明し、一体として保護していくことを目的に、同区域の発掘調査をおこないました。

2010年10月から12月までおこなわれた第10次調査東区の調査の結果、斉明朝以前の遺構、斉明朝の遺構、天武朝の遺構がそれぞれ検出されました。

斉明朝以前の遺構としては、何らかの施設の下部構造と考えられる掘込地業および土器埋設遺構が確認され、斉明朝以前にこの一帯の利用が始まっていたことが分かりました。土器埋設遺構は、土器の一部を打ち欠いて周囲に石を並べたものでしたが、内部からは目立った遺物は検出されませんでした。

斉明朝の遺構としては、石神遺跡から通路状に続く石敷と、基壇建物を含めた施設群の地固めのための南北48m以上におよぶ掘込地業、そして、その内部に設けられた様々な施設が確認されました。二か所で集中的に地固めをおこなった壺地業、小銅管や木樋を設置するために掘られた素掘溝、基壇建物の北側に東西９間（長さ24.6m）以上に細長く延びる東西棟建物などがこれに該当します。中でも素掘溝は、中間部分を中世以降の流路によって削平されているものの、調査区の南北両側で検出され、水落遺跡の中心部から石神遺跡へと続いていたことが把握されました。これにより、水落遺跡と石神遺跡が密接に関連する遺跡であることが改めて確認されました。

天武朝の遺構としては、以前の調査でその大部分が確認されていた７間×２間の東西棟建物の柱穴を検出し、この建物の規模を把握しました。

出土遺物は多くはありませんでしたが、土器埋設遺構に埋められていた長胴甕（がめ）、斉明朝以前の時期の素弁蓮華文軒丸瓦（そべんれんげもんのきまるがわら）、青銅小破片などが見つかっています。

現在、東区に隣接する第10次調査西区の発掘調査が進められています。

（都城発掘調査部　庄田 慎矢）

斉明朝の石敷（西から）

東西棟建物の北側柱列と掘込地業の北端（東から）

春日東塔院跡の調査（平城第477次調査）

奈良国立博物館の敷地内に、本来、春日大社に属していた東西の塔の跡があることは、意外と知られていません。1965年に奈良国立博物館により両塔の発掘調査がおこなわれており、遺跡の状況が明らかにされています。今回の調査区は1965年に発掘調査がおこなわれていない、奈良国立博物館本館（なら仏像館）の南東に計219㎡（うち８㎡は北門推定位置）の調査区を設定しました。今回の調査は、奈良文化財研究所と奈良国立博物館による初めての共同発掘調査で、2010年11月15日～12月27日まで調査をおこないました。

春日西塔（殿下御塔）は永久４年（1116）に関白藤原忠実の発願によって建立され、春日東塔（院御塔）は保延６年（1140）に鳥羽上皇の発願によって建立されました。しかし、両塔は治承４年（1180）に平重衡の南都焼き討ちにより焼失してしまいます。その後、東塔は建保５年（1217）に再建され、西塔は宝治年間（1247～1248）に完成したとされています。この再建された両塔も応永18年（1411）に雷火によって失われ、以後、再建されることなく現在に至ります。

今回の調査では、大きく２つの成果があげられます。まず春日東塔を囲む東塔院の北面および東面の区画施設にともなう外側の雨落溝を検出し、春日東塔院の北東隅の位置が確定しました。このうち、南北の雨落溝には多数の丸瓦や平瓦が埋没しており、区画施設の屋根に瓦が葺かれていた可能性が高いと考えられます。Ｌ字形に折れ曲がる外側の雨落溝と瓦の出土状況は、鎌倉時代の『春日宮曼荼羅図』に描かれている東塔院の姿を彷彿とさせます。

もうひとつの成果として、塔建立以前の様子の一端が明らかとなりました。今回の調査で東塔建立よりも古い時期の土坑や礫敷を検出したことで、東塔院およびその北方周辺の一帯が、塔建立以前にすでに開発されていたことが初めて明らかとなりました。

一方で今回の調査では解明できなかった課題もあります。治承や応永に東西塔が焼失した際に、塔のみではなく、塔を囲む区画施設も同時に焼失したのかどうかという点です。この点は今後の課題であり、周辺調査の進展を待ちたいと思います。

なお、12月17日～21日の５日間、奈良国立博物館ボランティアの方々に発掘現場の説明をしていただき、多くの方々に現場を見ていただくことができました。ここに記して心より感謝いたします。

（都城発掘調査部　海野 聡）

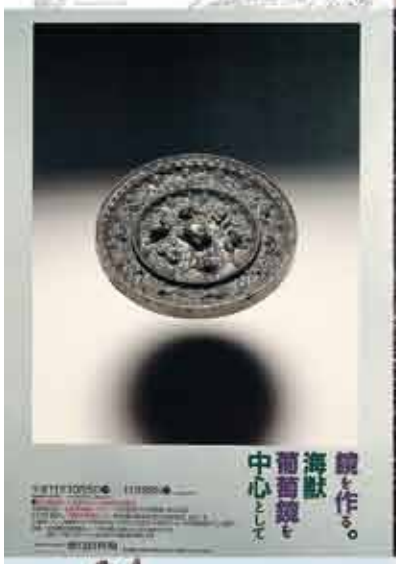
Ｌ字形に折れ曲がった春日東塔院の雨落溝（北東から）

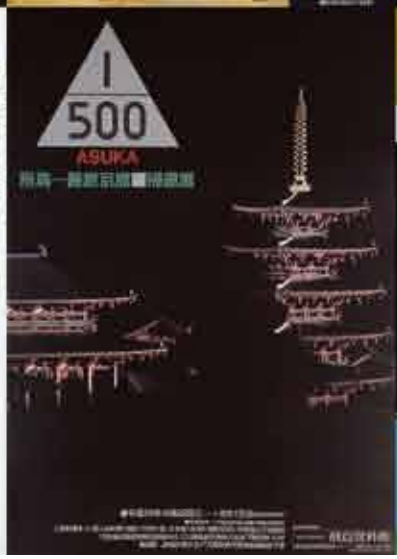
奈文研ギャラリー（32）

飛鳥資料館のポスター

「飛鳥資料館　特別展・企画展」のポスターは常に斬新なアイディアとそれにマッチしたセンスの写真を全面に押し出したデザインを通しています。その原動力になっているのが今年度研究所を定年退職する写真室専門職員の井上直夫と藤田頼伯デザイン研究室の藤田頼伯さんのコンビです。

二人のライフワークともいえるこのシリーズは1979年から続いており、今回のギャラリーは、井上カメラマンの業績の中の一部を紹介したいと思います。





飛鳥の美津城
キトラ
カラト
マルコ
高松塚。

遺跡を探る

飛鳥の湯屋

山田寺 東回廊
再現にむけて

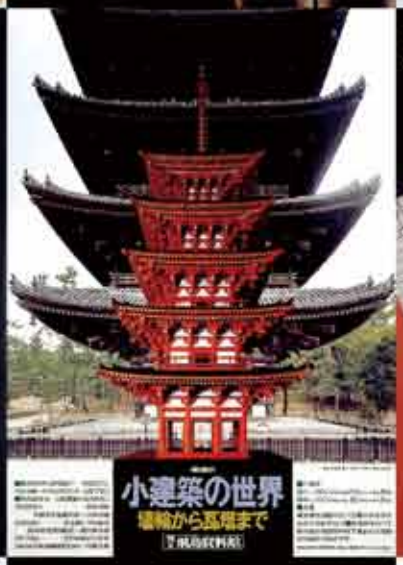
つぶやかれた文字

古墳を飾る

飛鳥時代の
埋蔵文化財
に関する
一考察

飛鳥の源流

蘇我二代


小建築の世界
墳墓から瓦塔まで

AOの記憶

日本書紀を掘る

東アジアの
古代苑池

古代の
苑池

古代の
形

ASUKA
SHIRYOKAN
飛鳥資料館

日韓発掘調査交流に参加して

奈良文化財研究所では、2006年度に韓国・国立慶州文化財研究所と「発掘調査交流協約書」を結び、それぞれの研究所の研究員がお互いの発掘調査に長期参加する交流研究をおこなっています。今回はその5年目にあたり、私は2010年11月29日から12月28日まで慶州に派遣され、新羅王京遺跡、四天王寺址、チョクセム遺跡の発掘調査に参加しました。

7世紀後半に創建された四天王寺址では、西面回廊西側で検出された鎮壇具の取上げ作業に携わりました。また、著名な大陵苑の東部の古墳密集地区に位置するチョクセム遺跡では、2基の積石木槨墳の断割調査をおこないました。鎮壇具の取り上げ作業も、積石木槨墳の調査も初めての経験だったため、担当の研究員と何度も話し合い、慎重に掘り進めていきました。日本ではできない貴重な調査に参加でき、私にとって大変有意義な発掘調査となりました。

調査に加わったいずれの現場でも、遺構の規模やその数の多さに圧倒されましたが、発掘作業を通じ日韓の遺跡の共通点や相違点を肌で実感でき、また、韓国の発掘調査方法も学ぶことができました。これらは自ら発掘をおこなうことでしか経験できないことで、発掘調査交流の重要な意義だといえます。

今回の調査交流では、多くの韓国の若手研究員と接する機会がありました。会話では私の拙い韓国語を必死で理解しようとして頂き、調査の面でも生活の面でも暖かい親切心と多大なご支援を頂きました。このような研究員同士の交流も双方にとって大変よい刺激になると考えます。

今回の共同研究で得られた経験を活かし、今後も日韓交流の助けとなれるよう努力していきます。

（都城発掘調査部　若杉 智宏）

四天王寺址での鎮壇具取上げ作業

韓日発掘調査交流に参加して

私は韓日共同「発掘調査交流協約書」にもとづいて、2010年5月17日から7月2日までの47日間、奈文研が実施している発掘調査に参加しました。

交流期間中には、藤原宮朝堂院地区と平城宮東院地区の発掘現場で調査をおこないました。私は現在、慶州で新羅王京の発掘調査を担当している関係から、近い時期に造営された藤原京と平城京について関心を持っていました。そのため、これらの発掘調査に参加できたことは非常に有益な経験でした。

日本での発掘調査で最も印象的だったのは、経歴と年齢を考慮した多様なチーム構成と役割分担、年間を通して空白なく進行する調査スケジュールでした。我々の研究所に比べはるかに構造的な調査運営体制は、奈文研において良質な調査成果を得ている基盤になっているようで、これは我々の研究所でも見習うべき点だと感じました。また、藤原宮の現場では、調査担当者以外にも様々な研究員が随時現場を訪れて調査内容について意見交換し討論しており、その姿勢は良い勉強になり、研究所らしい研究所の姿について再び考えるきっかけになりました。その他、周辺遺跡への踏査では、日本の遺跡の性格や復原整備事例を調査することができ、深い感銘を受けました。

47日間の短い日程で、二地域の発掘調査と数十箇所の遺跡を見学することができたのは、ひとえに奈文研の方々の積極的なご助力のおかげでした。このような良い機会を与えて下さった奈文研の皆様に心から感謝します。そして、5年あまりにわたり積み上げてきた二つの研究所の交流が今後も続き、学問的に良い成果が上がることを望んでいます。

（国立慶州文化財研究所　李 熙濬　翻訳 庄田 慎矢）

藤原宮朝堂院朝庭での実測作業

保存科学研究集会の開催

保存修復科学研究室では、保存科学分野に関する意見交換や幅広い情報交換をおこなう場として保存科学研究集会を開催しています。今年度は、去る２月５日（土）に奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂において「古代の玉－最新の保存科学的研究の動向－」と題して研究集会を開催し、全国から97名の方々にご参加いただきました。

今年度の保存科学研究集会は古代の玉製品を主題として取り上げ、ガラス製玉類をはじめ、石製、あるいは琥珀製の玉類などを対象に８件の講演がおこなわれ、製作技法や材質に関する最新の研究から、年代や生産地に関する様々な新しい情報が提示されました。とくにガラス製の玉類に関してはインドや東南アジア、さらにイスラム、ローマなどに起源をもつのものが、陸や海の交易ルートを経由して韓国や日本に伝えられたことが明らかとなってきました。もはや日本国内だけの技術の伝播や流通にとどまらず、広く世界的な視野も必要となってきているようです。総合討議では産地や流通などの議論に加えて、分析法やデータ解釈に関する問題についても活発な議論がおこなわれました。

ポスター発表では玉製品に限らず、広く保存科学に関する話題について取り上げ、鉄製品や遺構の保存などに関する６件の報告がありました。ポスターを前に、様々な話題が飛び交い、お互いが抱える保存科学分野の多くの問題が語り合われました。今後も様々なテーマで保存科学研究集会を開催していくことで、保存科学分野の発展につながっていくことを期待しています。

（埋蔵文化財センター　田村 朋美）

退職者のひとこと

奈良文化財研究所にお世話になって通算38年が経ち、いよいよ退職の時が訪れました。この間様々な発掘にかかわることができました。20代後半にはマルコ山古墳、考古学ではおそらく初めてファイバースコープで石室の中を観察したことで話題になりました。しかし、実際の撮影はズボンのベルトと脚を持ってもらい、盗掘孔から宙づり状態でファイバースコープを私が手に持ち、外でモニタを見ている先生方の言うがままに方向を変えたりしました。今から思うとずいぶん滑稽な話です。30～40代では特に山田寺の発掘に印象深いものがあります。おびただしい数の部材が散乱、瓦が葺かれたままの状態で倒壊した回廊など、強烈な印象を受けました。ほかにも水落遺跡の貼石遺構と特異な地中梁もかなりインパクトがありました。50代になってからはキトラ古墳、高槻市の闘鶏（つげ）山古墳、高松塚古墳の撮影などで機材の開発や撮影方法等を考えたりと、やりがいのある仕事ができました。様々な発掘が思い出されますが、なぜか長年藤原調査部にいながら藤原宮の印象が薄いような気がします。また、飛鳥資料館特展のためのポスター写真は30年以上に渡り自由に撮影できたこと等、本当に楽しく仕事ができました。38年の間に写真もすっかり様変わり。40代中頃からはデジタルとのつきあいが始まり、今ではデジタルなしには仕事ができなくなっています。銀塩さえ知っていれば仕事が成り立っていたのに…。おかげで頭は少し活性化できたことと、他では触ることのできないような最先端のデジタル機器を扱うことができたことです。思い返せばあっという間の38年間。長い間お世話になりました。

（企画調整部　井上 直夫）

気分は未だ40代

飛鳥資料館　春期特別展「星々と日月の考古学」

飛鳥資料館では 2011 年 4 月 16 日（土）から 5 月 29 日（日）までの間、春期特別展「星々と日月の考古学」を開催いたします。

本展では、古代の人々が見た夜空にきらめく星々や日月にスポットを当てました。星々に関わる出土品や史料の少なさから、これまでは古代の天文に関することはあまりわかっていませんでした。そこで、国内外の遺物やレプリカ、近年発展の目ざましい衛星考古学も合わせて、古代日本人の天文の知識や観念を探ってみました。その中でも、昨年に取り外したキトラ古墳壁画の天文図、高松塚古墳壁画の天文図は重要な手掛かりです。はたして、古代の星々や日月は、私たちに何を語りかけてくれるのでしょうか？

（飛鳥資料館　成田 聖）

特別展開催中は無休
〈問合せ先〉☎ 0744-54-3561

平城宮跡資料館　春期企画展「発掘速報展　平城 2009・2010」

奈良文化財研究所では、平城宮・京の発掘調査を継続しておこなっています。毎年、調査で明らかになった情報をいち早く皆様にお伝えするために速報展を開催しており、今回はその第 12 弾です。昨年は資料館改修のため開催できませんでしたので、今年は昨年度の成果もあわせ、たっぷり 2 年分の内容をお届けします。

宮内には、3 つの地区の調査でわかった宮殿や役所の実態を解説します。京内は、お寺や神社の調査成果を紹介。興福寺南大門出土鎮壇具の意外な中身も公表します。そのほか、宮内出土の木簡、最新情報や“うんち”の分析など見どころ満載です。なお、会期中毎週金曜日にはギャラリートークを開催しています。

（企画調整部　渡邉 淳子）

休館日：月曜（月曜が祝日の場合は火曜休館）
〈問合せ先〉☎ 0742-30-6753（連携推進課）

■　お知らせ

平城宮跡資料館　春期企画展
2011 年 2 月 19 日（土）～ 5 月 8 日（日）
「発掘速報展 平城 2009・2010」

飛鳥資料館　春期特別展
2011 年 4 月 16 日（土）～ 5 月 29 日（日）
「星々と日月の考古学」

■　記　録

埋蔵文化財担当者専門研修
○出土文字資料調査課程
2011 年 1 月 17 日～ 21 日　　15 名
○中近世城郭調査整備過程
2011 年 1 月 27 日～ 2 月 3 日　　18 名
○生物環境調査課程
2011 年 2 月 15 日～ 23 日　　6 名

平城宮跡資料館　冬期企画展
2010 年 11 月 26 日～ 2011 年 1 月 16 日
「測る、知る、伝える－平城京と文化財－」

飛鳥資料館　冬期企画展
2011 年 1 月 28 日～ 2 月 27 日
「飛鳥の考古学 2010」

■　最近の本－所員の著作から－

○石村　智『ラピタ人の考古学』（株）渓水社　2011 年 1 月
○箱崎　和久『近世の学校建築』（「日本の美術」No. 538）ぎょうせい　2011 年 3 月

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　http://www.nabunken.go.jp/
E メール　jimu@nabunken.go.jp
発行年月　2011 年 3 月